

## ナシ「あきづき」の花芽着生技術の確立

～ 6月下旬から7月上旬の新梢誘引で花芽の着生が増加～

栗山幸子（農業総合試験場環境基盤研究部

前・東三河農林水産事務所農業改良普及課）

【平成22年7月23日掲載】

### 【要約】

近年生産が増加しているナシ「あきづき」には、腋花芽の着生が少ない上に短果枝の維持が難しい特性がある。さらに、着生した花芽は果そう葉を持たない盲芽になる可能性が高く、より多くの花芽を着生させる管理方法の確立が望まれている。

そこで、新梢の誘引時期や角度が腋花芽の着生に与える影響について調査したところ、6月下旬から7月上旬に45度から水平方向へ新梢を誘引することで十分な腋花芽を確保できることが明らかになった。

腋花芽とは・・・新梢先端の葉の基部に形成される芽を頂芽といい、それより下側の葉の基部に形成される芽を腋芽という。この腋芽に花芽が着生したものを腋花芽という。

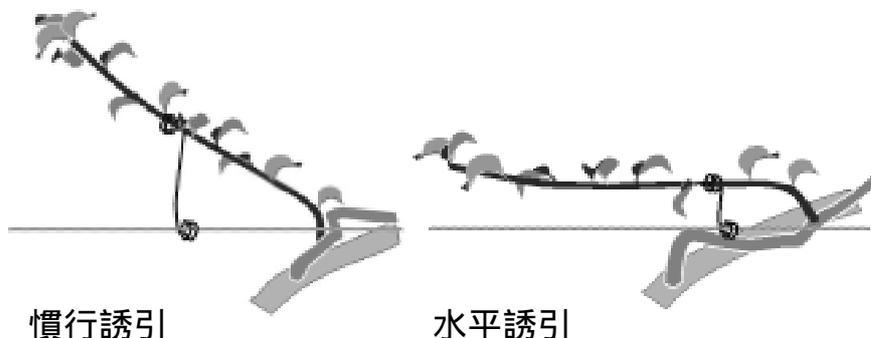
### 1 はじめに

ナシ「あきづき」は、「新高」と「豊水」をかけ合わせた品種に「幸水」を交配させた赤ナシで、酸味が少なく甘みが強い品種であり近年生産が増加している。しかし「あきづき」には、腋花芽の着生が少ない上に短果枝の維持が難しい特性がある。さらに、着生した花芽は果そう葉を持たない盲芽になる可能性が高く、より多くの花芽を着生させる管理方法の確立が望まれている。一方で、誘引時期を早めることに加え、誘引角度を変えることにより、腋花芽の着生を増加している事例がある。

そこで、新梢の誘引時期と誘引角度が腋花芽の着生に与える影響について調査した。

### 2 調査内容及び調査方法

慣行（棚面からの仰角30度から45度）よりも早期に誘引する区と水平に誘引する区及びその両方を組み合わせた区を設定した（第1図、第1表）。調査は、新梢の長さ及び基部の太さ、二次伸長数、腋花芽及び葉芽の着生数、腋花芽の長さ・幅について行った。



第1図 新梢誘引の方法

第1表 調査区の設定

処理区	誘引日	誘引角度(度)*
慣行誘引区	7/6	30~45
早期誘引区	6/25	30~45
水平誘引区	7/6	0~10
早期水平誘引区	6/25	0~10
無処理	-	-

\* 0~10度の場合は新梢が弓なりにならない程度とする

### 3 結果

#### (1) 誘引の時期及び角度と新梢の生育

新梢の長さ及び太さについては、誘引の時期及び角度による影響はみられなかった。また、新梢を誘引することにより二次伸長は少なくなり、特に水平に誘引した場合はほとんどみられなかった(第2表)。

第2表 新梢の長さ及び太さ

処理区	新梢数 (本)	新梢の長さ(cm)		二次伸長した 新梢数(本)	新梢の太さ(mm)	
		6/25	12/1		6/25	12/1
慣行誘引区	15	88.2	101.4	5	8.4	12.9
早期誘引区	12	89.7	100.3	3	9.2	13.0
水平誘引区	12	86.9	95.3	1	8.6	12.3
早期水平誘引区	14	87.9	98.1	0	8.7	12.1
無処理	10	-*	105.4	9	-*	14.2

\* 未処理

#### (2) 誘引の時期及び角度と腋花芽・葉芽の着生

新梢を誘引することにより腋花芽数は増加し、葉芽数は減少した。花芽の割合は早期水平誘引区がやや高い傾向があったが、誘引を実施したいずれの処理区も1新梢あたり約14~16個と十分に花芽は確保され、花芽率は約6割に達した。一方、誘引しない区では腋花芽が1新梢あたり3.2個しか着生せず、花芽率は13.6%にとどまった。また、腋花芽の大きさについては処理による影響はみられなかった(第3表)。

第3表 新梢の誘引処理の違いが腋花芽及び葉芽の着生・充実に及ぼす影響

処理区	芽数 (個)	腋花芽数 (個)	葉芽数 (個)	花芽率 (%)	腋花芽長 (mm)	腋花芽幅 (mm)
慣行誘引区	23.8	15.3	8.5	63.0	9.0	4.5
早期誘引区	25.5	14.8	10.7	59.5	8.9	4.7
水平誘引区	22.6	14.5	8.1	64.8	8.7	4.4
早期水平誘引区	24.5	15.9	8.6	65.4	8.8	4.6
無処理	22.2	3.2	19.0	13.6	9.4	4.1

#### 4 考察

(1) 腋花芽は6月下旬から7月上旬にかけて45度から水平方向へ新梢を誘引することで、十分量確保できることが明らかになった。さらに、「幸水」等とは異なり、誘引処理を行った枝では二次伸長が生じた場合でも腋花芽が不足しないことがわかった。また、誘引処理を全く行わない場合では腋花芽がほとんど着生しなかったことから、「あきづき」の誘引は必須作業であることが判明した。

(2) 新梢の誘引処理により十分な腋花芽が確保できるため、長果枝主体の栽培が可能であることが示された。しかし、栽培を続けていく上で毎年長果枝を確保するためには、予備枝や不定芽が発生しやすい部位（切り口下部のしわ）を多めに配置する必要がある。

Copyright (C) 2010, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.